

以上でございます。

(石川) ありがとうございます。これまでの私と橋爪と小林様の問題提起と万博をうまく絡めていただいて、まことにありがとうございます。

きょうも関西の方もたくさん見ているのですが、関西以外の方もたくさん見ておりますので、森副事務総長のメッセージはかなり伝わったと思っております。また、東京のメディアの方もかなり見られますので、ぜひ東京のメディアでも万博を報じていただければなと思っております。

では、最後に沖様、よろしくお願いたします。


(沖) 皆さん、こんにちは、沖と申します。

[我々の世界を変革する持続可能な開発のための2030アジェンダ]

本日は、SDGsということで、持続可能な開発目標についてお話をするわけですが、SDGsについて議論する際には、SDGsが書いてある元の文書「持続可能な開発のための2030アジェンダ」というのを理解していただくのが非常に大事だと思います。モノからコトへ、コトからココロへという話が本日ありましたけれども、このSDGsのココロは何かということを知ろうと思ったら、やはり2030アジェンダという文書を見ていただくのがいいと思います。



沖教授




東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO



2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 1

我々の世界を変革する

持続可能な開発のための2030アジェンダ

- ◆ 持続可能で公平なより良い未来への変革
- ◆ 人権や尊厳(社会)の尊重、地球環境の保全、
 繁栄(経済)の調和を目指す野心的な計画
- ◆ 我々は“人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解放
 放ち、地球を癒やし安全にする”ことを決意している。




そこには、我々の世界を変革すると書いてあるのです。そして、そのなかでは、持続可能で公平なより良い未来への変革をするんだ、変えるんだ、とあります。それに当たっては、人権や尊厳といった社会的な側面の尊重、地球環境の保全、そして繁栄、これは経済ですけれども、この社会、環境、経済の三つの持続可能な開発の側面を調和させるんだということが書かれています。

このアジェンダ2030を見ていただきますと、「我々は“人類を貧困の恐怖および欠乏の専制から解放し、地球を癒やし安全にする”ことを決意している」と書かれています。これがSDGsの背景となっているココロだと思います。

[私たちが希求する未来]

先ほど、2012年のリオ+20のサミットでSDGsの基ができたという話がありましたけれども、そのときに採択された文書がThe Future We Want、私たちが希求する未来、私たちが望む未来、欲しい未来、です。そういう視点でアジェンダ2030を読むと、そのなかには、物質的な欲求の充足だけではなくて、人間らしい尊厳を持ち、報われる生活を送り、潜在力を発揮する、と宣言されています。

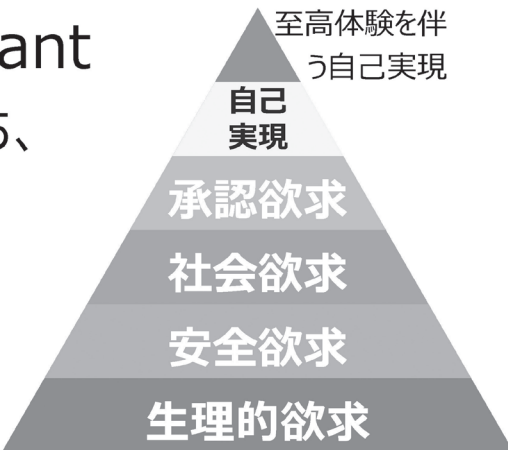
高校の倫理社会か何かで習うのではないかと思いますけれども、マズローの欲求5段階説というのがあります。つまり、生理的欲求、おなかがすいたら嫌だ、寝たい、いろんな欲求があるわけです。あるいは安全でいたい、危害を加えられたくない。そういうこれまでの非常に基本的な欲求に加えて、社会のなかで自分が求められている存在でありたい、あるいは褒められたい、あるいは自分が活躍している、あるいは何か自分の能力が最大限発揮されているという実感を持つ、そういうまさにココロというのを私たちは求めているのだと思います。


2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 2

私たちが希求する未来

◆ The Future We Want

- ※ 人間らしい尊厳を持ち、
- ※ 報われる生活を送り、
- ※ 潜在力を発揮する。



至高体験を伴う自己実現

自己実現

承認欲求

社会欲求


安全欲求

生理的欲求

これから


これまで

マズローの欲求5段階説


SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

[目標のかなたへ]


そういう意味では、The Goal and Beyond、2030 and Beyondという話が、今、森様からありましたけれども、現状のSDGsにない課題というのはたくさんあるわけです。笑いもありません。ボケも突っ込みもありません。多分、それがないと大阪の方は3日生きていけないのではないかと思いますけれども、文化、スポーツ、エンターテインメント、芸術、知的好奇心や幸福感の充足、そういう側面がSDGsにはないのです。では、2030年、それらがなくて私たちは幸せに暮らせるでしょうか。多分、そんなことはないでしょう。あるいは日本特有、あるいは日本が世界に先駆けて問題となっている急速な高齢化や若年層の肥満。それらも深刻な問題ですし、やがて世界の他の国々でも重大になるでしょう。つまりSDGsだけが達成されればいいというわけではありません。とはいえ、まずSDGsから考えてみるというのが、いいSDGsとのつき合い方なのではないかと思います。



 2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 3

目標のかなたへ

💧 The Goal and Beyond

- ❄️ 現状のSDGsにはない課題
- ❄️ 文化、スポーツ、エンターテインメント、芸術、知的好奇心や幸福感の充足、…
- ❄️ 急速な高齢化、肥満、…




 SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

[I mean business.]

そして、I mean business。これは、英語では、「私は仕事をしています」ではないのですね。「私は本気だ」という意味です。つまり、「business」という単語にはそういう意味があります。SDGsとビジネスの関係でいいますと、慈善事業や寄付行為、あるいは義務・費用としてやるのではなくて、本業でSDGsに取り組んで社会に価値をもたらすからこそ、自分たちがもうかる、SDGsに取り組むのは義務ではなく権利だ、ということです。

あるいは、先ほど、小林会長からなかなかビジネスは黒字にならないというお話がありましたが、捨てているお金ではなく、投資である。で、より良い社会構築に貢献するからこそ、私たちはビジネスも

成り立つし、社会も良くなって、自分たちの会社も持続可能になるのだ、といった点が非常に重要なのではないかと思います。

アダム・スミスも『国富論』のなかで、我々が食事を当てにできるのは、肉屋や酒屋やパン屋が慈善家だからではなく、彼らが自己の利益に関心を持っているからだ、と述べています。これは、ある意味でいうと、SDGsのビジネスセクターに対する期待でもあり、利益のために構わないので、ぜひ投資をしてくれ、より良い社会をつくるために投資をしてくれ、それが、会社も社会も国や個人も持続可能になるのだ、ということなのではないかと思います。

そういう意味では、実は、I mean businessではなくて、We mean business連合というのがすでにできていまして、WBCSDとかCBDとか、その筋の方はよくご存じのところと一緒にあって、私たちは本気だ、本気で良い社会にしながらビジネスを盛り上げるぞ、というのがもう2014年に始まっています。

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO 2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 4

I mean business.

💧 慈善事業や寄付行為(義務・費用)ではなく本業(権利・投資)でよりよい社会構築に貢献


※ “我々が食事をあてにできるのは、肉屋や酒屋やパン屋が慈善家だからではなく、かれらが自己の利益に関心を持っているからだ(アダム・スミス「国富論」)”

※ We mean business連合(2014~)

➤ WBCSD, CBD, The Climate Group, ...

WE MEAN BUSINESS COALITION

<https://www.wemeanbusinesscoalition.org/we-mean-business-japan/>



〔持続可能でない未来〕

では、持続可能でない未来と持続可能な未来はどんなものか。

例えば持続可能でない未来というのは、ナショナリズムが再燃して、国際協調が弱く、地球規模課題への挑戦能力が不足している。そして、一部の地域では環境も悪化するし、各国は国内の地域問題に焦点を当てざるを得ない。そうすると、エネルギーをどう確保するのか、食料をどう確保するのかといった点が最大の関心事になり、関税障壁も大きくなってくる。一方で教育や技術開発への投資は減ってしまっていて、結果として経済は発展せず、消費は物質的なモノに集中するわけです。



持続可能でない未来

- ◆ ナショナリズムの再燃、国際協調が弱く地球規模課題への調整能力が不足
 - ※ 一部の地域では環境悪化が顕著に
- ◆ 各国は国内・地域問題に焦点
 - ※ エネルギー資源や農業市場の貿易障壁
- ◆ 教育と技術開発への投資は減少。
- ◆ 経済は遅々として発展せず、消費は物質的なモノに集中。

(by William Hogarth, 1751)



〔持続可能な社会〕

そんな未来が持続可能でない未来だとしたら、持続可能な社会では、多様なステークホルダーの協調によってグローバル・コモンズの管理が改善します。大気、気候変動の問題もそうですし、地球環境そのもの、あるいは国際間の連携もグローバル・コモンズだと言っていると思います。環境を尊重した包括的な開発が重視されて、少ない資源や少ないエネルギーでモノが作られて、それを私たちが消費するようになります。教育や健康への投資が増え、その結果として人口はあまり増えなくなります。そして、何よりも経済成長の重視から人間の幸福をより広く重視する方向にシフトしていったら、国の内外を問わず不平等は縮小します。

〔利己的に考えてもSDGs〕

この持続可能な未来と持続可能でない未来、どう考えても、皆さん、持続可能な未来のほうがいいに決まっていますよね。そう考えますと、本日のもう一つ、陰のテーマかもしれませんが、ESG投資というのは、別に慈善事業として長期投資家はESGをやってくださいね、持続可能な開発に貢献してくださいね、と言っているだけでもないのではないのでしょうか。

つまり、外部不経済、環境や社会に何らかの害悪をまき散らしながら、法のカギをくぐって儲けているような企業というのは、長期的に見ると市場から退場させられていくだろう、あるいは社会課題が解決できない企業というのは、利益も上がらないし、今回のCOVID-19、新型コロナウイルス感染症や10年前のリーマンショックのような外的ショックにも弱いでしょう、ということで、そういう点を長期投資家は多大な興味を持って見極めようとしているわけです。



持続可能な社会

- ◆ 多様なステークホルダーの協調により、グローバル・コモンズの管理が改善。
- ◆ 環境を尊重した包括的な開発を重視
 - ※ 資源やエネルギー強度が低い消費に
- ◆ 教育と健康への投資 → 低い人口増
- ◆ 経済成長の重視から、人間の幸福をより広く重視する方向にシフト。
 - ※ 国の内外を問わず不平等は縮小

(by William Hogarth, 1751)



ビール街



利己的に考えてもSDGs

- ◆ 長期投資家がESG投資としてSDを要求
 - ※ 外部不経済を社会に押し付ける企業はいずれ退場
 - 社会課題の解決なしに利益は上がり、外的ショックにも脆弱
 - ※ 非価格競争における国際的な評価軸の共通言語
 - ソフト・ローとして非関税障壁にも ⇔ チェックリストとして活用
 - ※ 企業や組織と雇用の持続可能性の確保
- ◆ やる気と使命感に満ちた優秀な人材が集まる



あるいはSDGsに書かれているような論点あるいはターゲット、指標を守っていない企業は市場から排除するよという意味で、国際的な共通言語として使われるようになっていきます。ヨーロッパなんかは恐らく、ちゃんとした法律ではないのだけれども、ソフト・ローとして、人権や環境に配慮されていな

い企業のモノやサービスはうちの市場には入れませんよ、となっているわけです。


あるいは企業や組織と雇用の持続可能性の確保という意味でも、SDGsは大事ですし、何よりも本日の橋爪さんのお話にありましたけれども、若い方は、どうせ仕事で苦勞するのだったら、社会に価値を生み出して、そして自分たちはそのなかでビジネスをやっていきたい、社会のなかで活躍したいと思っています。優秀であれば優秀であるほど、そういう学生さんは多いので、やる気と使命感に満ちた優秀な人材が集まるという面でも、やはりSDGsに取り組むのが吉であると思います。

〔時をかけるCOVID-19〕

最後、COVID-19について、実は、もし、この感染拡大が2010年だったら、つまり、10年前だったらどうでしょうか。10年前はネットワーク環境も良くないですし、あるいはE-commerceとしてウェブでクリックするとモノが届くというようなシステムもまだ不十分でした。

では、逆に10年後だったらどうかと考えますと、10年後に、別のウイルスで同様のパンデミックが起こったときに、被害がもっとひどくなるのか、軽くて済むのかは、私たちが持続可能な社会を構築しているかどうかにかかっていると思います。

そういう意味では、逆に、私たちは若干準備をしていた2020年で良かった。これが2010年や2000年だったら、例えばこうやってオンラインのシンポジウムは不可能だったわけです。そういう意味では、いつの間にか備えていたということかなと思います。




2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 8

時をかけるCOVID-19

- ◆ 2018年の感染症拡大の危険性の警告を信じたとして、
 - ※ リモートサービスや無人化などへ業態転換していたか？ いつの間にか備えていた？！
 - ※ 社会としてどんな対策・準備ができたでしょうか？
- ◆ もし感染拡大が2010年だったら？
 - ※ 在宅勤務もE-commerceも困難
- ◆ もし感染拡大が2030年だったら？
 - ※ 被害はもっと酷い？軽い？

エドワード・ジェナーの種痘



https://circulatingnow.nlm.nih.gov/2018/08/07/edward-jenner-and-the-happy-immunity/

1 PEOPLE

2 ZERO WASTE

3 GOOD HEALTH AND WELL-BEING

4 QUALITY EDUCATION

5 GENDER EQUALITY

6 CLEAN WATER AND SANITATION

7 AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY

8 DECENT WORK AND ECONOMIC GROWTH

9 INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE

10 REDUCED INEQUALITIES

11 SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES

12 RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION

13 CLIMATE ACTION

14 LIFE BELOW WATER

15 LIFE ON LAND

16 PEACE, JUSTICE AND STRONG INSTITUTIONS

17 PARTNERSHIPS FOR THE GOALS

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

〔夢の22世紀へ向けて〕

夢の22世紀へ向けて。2030年はすぐ来てしまいます。未来に向けて何をしなければいけないか。環境保全、社会正義、経済発展の調和が大事である。そういうのを考えたときに、ぜひ、SDGsに当然含まれているべきなのに入っていない目標は何なのか、といったことも考えていただけたらいいのではないかと思いますし、未来はどうなるかではなくて、どんな未来を私たちは実現したいのか、The Future We Wantというのをぜひ考えていただきたいと思います。

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO 2020年12月10日・日本総研シンポジウム「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」©沖 大幹 <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/> 9



夢の22世紀へ向けて

●環境保全、社会正義、経済発展の調和が大事

- ※ SDGsの目標、ターゲットや気候変動の緩和・適応策の間にトレードオフの懸念も ← エネルギー、土地、水…
- ※ 生活者のSDGsに沿った消費行動への変化も
 - ▶ 価値あるモノやサービスには相応の対価を払う

●未来はどうか、ではなく、どうするか。

- ※ SDGsに入るべきなのに入っていない目標は？
- ※ 潜在的な課題の解決に先導的・主体的に取り組む



〔『たのしい四年生』1961年1月号口絵〕

最後に、『たのしい四年生』という雑誌の、多分、新年号の表紙裏についていたと思われる口絵です。1961年、私が生まれる前ですけれども、その1961年に100年後の東京を想像して描かれた絵です。やっぱり何となくわくわくするんですね。こういう未来を私たちは思い描いて、それを、そうだったらいいなあ、と。単に夢に描くだけではなくて、それを実現するために今から何をしなければいけないか、というのをぜひわいわいと語り合って、その実現に向けて一緒にやっていたらいいのではないかと思います。

ありがとうございます。



(石川) ありがとうございます。モノからコトへ、ココロへというのは、私としてもかなり響く言葉でした。SDGsごっこになっている会社もたくさんあると思うのですが、そうならないためには本気でやらなければいけないという気持ちが大変伝わってきました。ありがとうございます。

では、皆様、プレゼンテーションありがとうございます。非常に様々な角度からプレゼンテーションしていただきまして、SDGsに対する考えが聴講者の方も深まったのではないかと考えております。

早速ですが、討論に入りたいと思います。まず、皆様の世界観などをお聞きしたいのですが、ポストコロナ時代、そのなかで我々が目指すべき社会はどうあるべきか、ということでございます。

まず小林会長にお聞きして、その後、沖先生、森副事務総長の順番でお聞きしたいと思っております。

では、小林会長、よろしくお願いいたします。

(小林) 日本では、Society 5.0は、政財界でも大分議論が進んでいます。世界経済フォーラムでは、第四次産業革命と言われていますが、日本の場合は、5番目の社会という意味で、狩猟から農耕に行き、工業化社会になり、情報化社会になり、これからはAIなりIoTなり、ネットといったツール、テクノロジーの時代です。これらをどう人々の快適さに繋げていくか。No one left behind、そういうインクルーシブな社会がSociety 5.0であるわけです。

ですから、まさにモノづくりからコトづくり、コトづくりを超えて、人々の快適性といいますが、やっぱりココロの満足度。単に物的な満足度というのは基本的にはかなり確保できているので、快適さというか、サステナビリティとシンバイオシスというか、循環的な持続性と共生社会といいますが、そういったことが重視される社会、それが我々の目指すべき国家であり、世界なのかなと思いますね。

(石川) ありがとうございます。ココロの時代、共生社会、大変重要なキーワードをいただきました。沖先生、どうでしょうか。

(沖) ポストコロナになって、私たちの未来を変革するなかで、これを機会にやめてしまいたいものはどんどんやめればいいと思いますし、新しいものを導入すればいいと思うのですが、アダム・スミスは、変革は徐々にとっているのですね。やはりあまり変革が速過ぎるとついていけない私たちもいますので、そういうところに配慮しながらDXでより快適な社会にしていくのが大事かと思います。

また、今回のCOVID-19、新型コロナウイルス感染症で分かったのは、私たちにとって何が大事かです。それは、ココロの問題でいうと、例えば人と会ってわいわい騒ぐというのがこんなに大事なんだ、あるいは好きなんだ、あるいはテレコミュニケーションもかなり良くなりましたけれども、それでもなかなか信頼関係を築きにくい。やっぱり何だか知らないけれども、実際に会って話をしていると気心が知れた気になる、「同じ釜の飯を食う」という言葉がありますけれども、一緒に御飯を食べると何か仲良くなった気がする。そういう何が大事かというのを分からせてくれた気がします。

そういう意味では、人の移動がなくなっても、モノは動かさなければいけないので、そのモノの移動効率をどうするかというのも非常に大事だと思います。逆に、人と人が実際に会うということの貴重さの価値が高まるのではないか。あるいは遠くに行って、バーチャルでしか見ていなかった風景、実際にその場に立つ感動というのが、実は前よりも上がるのではないかとも思っています。

(石川) ありがとうございます。確かに人と会ってわいわい騒ぐ、それができないというのはこれほどつらいことかというのが、本当にこの1年間痛感したかなと思っています。オフラインだからできること、リアルの良さ、その両面を考えていく必要があるなと思って聞いておりました。

では、森副事務総長、どうでしょうか。

(森) リアルの重要性について沖先生が指摘されました。万博ではリアル会場とバーチャル会場をやりますと言いましたが、夢洲はまさにリアルですので、バーチャルを知った人がリアルにぜひ行きたいというような、リアルの重要性をぜひ確認してもらおう場であってほしいと思います。もう一つは、コロナ禍になって、先ほど、小林様から「茹で蛙に蛇を」というのがありましたが、そのなかで、デジタル社会、サイバー社会とどうつき合っていくのかということが非常に大きな議論になっていくと思っております。

デジタル社会のルールということですが、2年前に大阪で開催されたG20で、——また大阪の宣伝ですみませんが——大阪トラックということで、Data Free Flow with Trustというのができたのですが、これには二つぐらいのアプローチがあります。欧州アプローチというのは、デジタル社会は限界費用がゼロになると言われていますけれども、例えばプライバシーとかセキュリティにはコストがかかるのではないかと、つまり、限界費用ゼロではだめなのではないかと、といったアプローチが一つ目であると思います。もう一つは、先ほどの資料説明のときにも申しましたように、デジタル社会のなかで、どのように主体的に社会の付加価値を高めていけばいいのか、自らの力でどのように付加価値を高めて

いけるのか、ということが重要で、それが万博でやりたいことのひとつだと思っております。

一つ良い言葉がありまして、ゲームという言葉です。日本のゲーム産業は非常に強くて、ゲームというのは、やりながら自然にデータを自分のものにできてしまう性格のもので。また、ゲーム感覚という言葉ですね。これ、日本語にはあるのですが、英語とかフランス語にはないらしく、このゲーム感覚で物を考えるとかというのは、若者の思考にもぴったり合います。こういったゲームのようなものを通じてデータを自らのものにしていくといったムーブメントを万博でつくれたら、このポストコロナにふさわしい万博になるのではないかなと思っております。

(石川) ありがとうございます。どれもこれも非常に鋭い指摘で、大変勉強になりました。確かに、万博でもデジタル社会とのつき合い方を強調していくと思うので、そこを追求していくという話だと思います。その一方で、やはりリアルの良さを再確認したところの話も大変貴重なご意見だったと思います。

お三方を通じて共通する言葉が、心とか、楽しいとか、わくわくという言葉が出てくるというのは非常に興味深くて、やはりSDGsというのは楽しいものでないと広がらないのかなと。万博もやっぱり楽しいものでないといけないのではないかと、思いました。ありがとうございます。

では、続きまして、次のテーマに移りたいと思います。そういう世界観を踏まえて、わが国におけるSDGsをどのように見るのかといった話をお聞きしたいと思っております。このままでは世界の潮流に乗り遅れるのではないかと、ちょっと刺激的なことを聞いているのですけれども、SDGs全般でも結構ですし、それにまつわるガバナンス、規制とか、企業の運営の在り方とか、そういったものまで含めてお聞きできればなと思っております。

ここでは、沖先生にお話ししていただきまして、その後、森副事務総長、小林会長の順番でお話をお聞かせ願えたらと思います。

では、沖先生、よろしく願いいたします。

(沖) まずは、最初の石川さんの話で、先導するぐらいの気概を持つという話がありましたけれども、やっぱりやらされている感、世界のどこか、ニューヨークで決まったからやらなきゃいけないというのでは、なかなかやる気が起こりません。SDGsでは若干後れを取ったけれども、Beyond SDGsでは主導するぞ、世界を先導して引っ張るぞ、というぐらいの気概を持っていただくのが非常に大事なのではないかと思います。

そして、今、日本の企業は、今まで政府が担ってきたより良い社会をつくるということに対して投資をしても構わない、という気になっていると思います。それに対して私たち生活者がもう少し、エシカル消費と言われるような、持続可能な社会の構築に資するモノやサービスに相応の価値を払って利用する、ということをやったほうがいいのではないかなと思っております。

1円でも安いものやサービスを選ぶのではなくて、こっちのほうがより人権や社会に配慮されているかな、環境に配慮されているかな、というように私たちが選ぶことです。私がお話を聞いていると、企業はどこも、いつでもそういうものやサービスに転換できますが、もしかすると、若干コストが高いの

で消費者がついてきてくれないのではないかと、というので躊躇されて待っている状況のように感じます。

なので、企業に突き上げばかりをするのではなくて、私たちの日常生活の消費行動を変えることが、実は、社会を変えることにつながっていく。それがSDGsの達成に貢献すると思っています。

(石川) ありがとうございます。確かにやらされている感がある人が多いので、ここはリーダーシップをとるといえるのはとても重要だなと思って聞いておりました。あと、世間の方は、「SDGs、何をしたらいいのですか」とよく言われるのですけれども、一番簡単にできることは、このエシカル消費かなと思って聞いておりました。聞いておられる方も賢い消費者になっていただきたいなと思います。

では、森副事務総長、どうでしょうか。

(森) 私は、今、万博のロゴを付けていますが、これをつける前はSDGsの17色のバッジをつけていました。今、沖先生もつけておられますけれども、恐らくこのSDGsのマークを1番よく知っているのは日本人ではないかと思っています。先ほど、「デザインの力」と言いましたけれども、やはりこの「デザインの力」というのは恐るべき力を持っていて、SDGsというのをお子さんから高齢者の方まで何か親しみのあるものとして捉える、それがSDGsを真剣に考える機会になっているという点については、日本は多分、世界一だと思っています。

それで、先ほど、沖先生からも仰っていただきましたが、我々、万博でSDGsの次を自ら考えていきたいと思いますという提案をしているわけです。SDGs自体は2012年とか10年ぐらい前からできてきたもので、そこに日本の方がどこまでかかわっていたかというのは、私は分からないのですけれども、あまりかかわってはいないようです。SDGsの次を考える過程においては、我々が主体的に取り組むことが重要だと思います。まずは、現在のSDGsとは何かという議論から始めなくてはいけないかもしれません。そういうことを、この関西・大阪だけではなくて、国民的な運動として、日本が主導してやっていくのは、企業の方々にとっても個人にとっても非常に意味があることだと思っていますので、我々、そのような形で万博を活用してもらいたいと思っています。

もう一点だけ、70年万博のときは、小松左京さんが「人類の祭典」だと名付けられたわけですが、2025年は「いのち輝く未来社会のデザイン」と申しました。我々は、2025年の万博を、人類を含む「万物のいのちの祭典」と位置付けておまして、その万物のなかに人間も入ったなかで、どうSDGsを考えていくか、という立てつけにしたいなということで、ここ2~3年やってきたわけです。スペイン風邪のときも相当数の世界中の人が認識したのかもしれませんが、今回は、これだけのデジタル社会で、世界中が同じ病について、同じようにマスクで過ごすという未曾有の体験を同時にしたわけですので、万物のいのちとともに人間のいのちをもう一度考える機会として、2025年の万博を位置付けてもらえればありがたいなと思っています。

(石川) 確かに国民的な運動になるためのきっかけとして、万博はかなり活用してほしいなと思っています。

沖先生の話にもありましたし、森副事務総長の話にもありましたけれども、皆さん、SDGsの先まで

見据えられているというのが非常に興味深かったので、その辺の話も後で深められたらなと思っており
ます。

最後に小林会長にお聞きしたいのですけれども、小林会長はいろんな世界を見ておられるので、世界
と比べてどうあるべきかという話と、あと、個人的なリクエストなのですけれども、最近、御社は社長
を海外の方がやられるということで、それは世界の潮流を見据えた動きだと思っていますので、この二
つについてお答えいただけると大変ありがたいと思います。よろしく願いいたします。

(小林) まず、当社は指名委員会等設置会社として、指名委員のうち四人が社外取締役で、私一人だけ
が社内、そういう布陣で、ベルギー人のギルソン氏を次期社長に指名しました。シンプルに、世界中か
ら当社に1番合った人を選ぶという姿勢です。企業経営の多様性の一つの形かと思うのですが、当社は
ホールディングス制をとっていますから、実際のオペレーションをやっている傘下の各事業会社の社長
がしっかりしてさえいれば、持株会社はポートフォリオマネジメントとコンプライアンス等を含めた
ブランド価値の維持向上に徹することができるので、確かに外国人社長というのは大変なトライアルで
はあるけれども、リスクは比較的小さいのではないかと、三菱ケミカルホールディングスの企業価値の向
上のためにはこれが最善だと、今回、そういう指名委員会の決定になりました。指名プロセスは全部ウ
ェブ会議で、実は私は彼の顔をまだ直接見ていないんですね。連休からこの夏のお盆まで、4~5回、
ウェブでプレゼンテーションを聞いたり、こちらからプレゼンテーションをやったり、そういう形で、
結果として総勢7人から10人のなかで、社内の日本人ではなく、アメリカに在住してフランスの会社の
社長を務めている人を選びました。

あと、SDGsについて日本はどうかというと、先ほど、森さんが言われたように、私自身はSDGsバッ
ジをつけたことはないのですが、経団連の関係者は皆つけています。それを私が揶揄して、「何か戦
前の日本みたいだ」と言ったぐらい、日本人というのは一緒にやれる、団結できる人種なのですね。だ
から、その気になってベクトルの方向が正しいと、ものすごい力を発揮できる。

一方では、アメリカの共和党のように、イギリスもそうですけれど、頑なにマスクもつけない、あく
まで自由を重んじるというか、とにかく個を大切にするという世界もある。GAFAsの隆盛を見れば、デ
ジタル社会というのはやはり集団よりも個の力を大切にしなければいけないということかもしれません。
比較文化論としては非常におもしろい現象を呈しているのかなという気がします。

例えばダボス会議でバッジを着けている人はあまり見ないのですね。ですが、日本人経営者はびっく
りするほど一様につけている。着けていないと、もう大変な村八分みたいな雰囲気になる。ところが経
済同友会では、私がこんなことを言っていたもので、つけている人は少ない。どちらが正解かよく分か
りませんが、やはり集団主義ではなく、個の力も解放した最適な組み合わせが求められているの
だと思います。

最後に1番申し上げておきたいのは、日本の政治家にサイエンスリテラシーがある人があまりにも少
なすぎるということです。加えて、女性がまだまだ少ない。多様性に乏しくて、何となく今までは文系
の経済か政治、法律を勉強した男性ばかりが政治家になってきました。しかし、中国やドイツなど、結
構サイエンティストが政治家を務める国が増えているのですね。こういうパンデミックとかデジタル化、

あるいは地球環境問題、水の問題等々を考えたら、やっぱりサイエンスとポリティクスの融合、協働がどうしても必要不可欠です。したがって、国民自身のサイエンスリテラシーを上げていかないと、SDGs以前になってしまうのではないかという危惧を持っています。

ですから、まさに文理融合的な教育、ELSI視点の涵養も含め、国民の知的水準の向上が、今、日本で最も大切になってきているのではないかなと思います。

(石川) ありがとうございます。社長就任の裏話などをしていただきまして、ありがとうございます。

確かに気が付くと、皆さん、バッジをつけて、みんな同じ方向を向く。それは何か良くないかなと思いつつも、ベクトルが正しいとうまくいくという話は、なるほどと思って、そういう意味で、正しいベクトルをつくっていくということがすごく大事なのかなと思いました。

さらに、サイエンスリテラシーの重要性、その通りかなと思っております。今回、パネルディスカッションをさせていただいておりますけれども、パネリストの方のうち、お二人が理系出身で、SDGsを語るに当たって理系のことを分からないとできないという話もあります。その一方で、私みたいな経済の人間とかコンサルみたいな人間がいて、やはり多面的に議論するためには、サイエンスリテラシーを上げていくことはとても重要だと思って聞いておりました。ありがとうございます。

今、お三方に話を聞いたのですが、今までの話を聞いて、ちょっとお話し足りなかった点とかありますか。沖先生、何かございますか。

(沖) 今、小林会長がバッジをつけないという話をされたのですが、多分、SDGsがここまで広まったのも、森さんがおっしゃる通り、バッジとあのアイコンが良かったのだと思うのですね。

そうしたなか、小林会長が何でつけられないか。私の理解では、2010年に『KAITEKI化学』という本を出されていて、サステナブルな社会への挑戦について書かれている。私は水専門なので、水に関連した事業のKAITEKI化インスティテュートでの立ち上げを当時少しお手伝いして、そのご縁で家に小林会長の本が4冊ぐらいあるのですけれども、はっきり言うと、SDGsで言っているような内容を先取りされて、それを「KAITEKI」と呼ばれていたわけです。ところが、「KAITEKI」と呼ぶと世界になかなか広がらず、似たような概念のSDGsが広まったということで、多分、非常にじくじたる思いをされていて、「俺のほう先だ」と思っているから、悔しくてつけられてないのではないかと考えています。

(小林) いやいや、素晴らしいご解説です。今さら何を、という思いがありますね(笑)。

(沖) いや、だから、そういう意味では、世界スタンダードにしていかななくても日本でやっていたら大丈夫だと思っていると、何となく覇権を握られて悔しい思いをするというのがあると思います。ですので、小林会長、次はぜひ主導権を握っていただくということで。

(小林) そういう意味では、アメリカのアリゾナ州立大学と共同で、2019年4月に、「The Global

KAITEKI Center」という研究所をつくったんですよ。また、東京大学の「グローバルコモンズセンター」とも共同研究しています。ASUはサステナビリティ学で世界をリードしており、東大もかなり先進的ですので、そういう意味では、世界的展開ができるだろうと期待しています。僕にはやはり、トヨタの「Kaizen」とかキッコーマンの「Teriyaki」と同じように、当社のアルファベットの「KAITEKI」を世界語にしたいという夢があるので。

(沖) 2030年アジェンダ、これは大いなるaspirationである、野心であるを書いてあるので、やっぱりそういうのは大事かもしれないです。

(石川) そうですね。ぜひともこの「KAITEKI」を世界語にしたいなと思って、今、聞いておりました。

そういう意味で、わが国が世界の潮流に乗り遅れないために主導していく。そのためには、主導する言葉をつくっていく必要があるのかなと思います。その言葉が「KAITEKI」なのかなと思って、今、聞いておりました。ぜひここにいるメンバーの力で「KAITEKI」を世界語にしたいなと思います。ありがとうございました。

では、次のテーマに移りたいと思います。SDGsに対する理解は深まってきたのですが、やはり一番大事なことは人材育成です。先ほど、橋爪のプレゼンにもありましたけれども、やはり次世代の人材にどれだけ本気になってもらうか、そういったことが大事なのかなと思っております。

意識改革、人々の納得感、そういったことについて、どういった点に留意すべきなのか、ぜひとも皆様の率直なご意見を聞きたいなと思っております。森副事務総長、沖先生、小林会長の順番でお聞きしたいと思っております。

では、森副事務総長、よろしく願いいたします。

(森) この話の前に、先ほど、理系の方の重要性という話をさせていただいたのですが、万博協会は、今、200名ぐらいで、私を含めた公務員が6割、民間から4割で、積極的に理科系の方にも入ってもらっています。寄り合い所帯ではありますが、理系、文系入り交じり、200名が和気あいあいとやっております。

私ごとですが、最近、カルロ・ロヴェッリさんという人の本を読んで、人間の原子というのは、138億年前のビッグバンのときにできて、そこから原子の量は変わっていないということで、そういう理系の本を読むと、文系の私もウツと考えることがございます。そういうものを私が読む契機になったのも万博の担当になったからでございます。私は万博協会の人間ですが、万博をサイエンスや、また社会の仕組みとかを考える場にさせていただければと思っております。

そして、SDGsの人材育成ということですが、先ほど、私、「TEAM EXPO 2025」という枠組みのなかで、「共創パートナー」や「共創チャレンジ」を始めていきましょと申しました。大阪や関西では、中学校のロボットサイエンス部ですとか、また、自治体の方が高齢者の健康運動と万博を結びつけようとか、100個ぐらいのプロジェクトが上がってきています。そういうものを、これから東京オリパラが

終わったら、東京、日本全国、そしてアジアへ、世界へとつなげていきたいわけです。また、万博の期間中には、テーマフォーラムという対話の場をたくさんつくって、そこでSDGsやSDGs+ beyondといったものを議論していきたいと思っております。

そのときには、ぜひ小林会長や沖先生にもご参加していただきたいと思ひますし、世界の哲学者にも来ていただきたいと思ひます。また、そういう場であれば、私が大好きなレディー・ガガさんといった方にも、歌を歌うというより、いのちについて語るということに来ていただけないか、また、一般市民の方々や、TEAM EXPO 2025をやってくださっている方々も参加していただけるように、あと4~5年で盛り上げていけば、万博成功は間違いないと思ひます。

また、万博会場にはベストプラクティスエリアという場所を設けて、世界から、日本から、いろいろなSDGsやSDGs+ beyondのアイデアを、週替わりになるか、2週間おきになるか、月替わりになるかわかりませんが、どんどん見せる。それをうまく小学生や中学生にも楽しめるようにするのがプロデューサーの方々の腕の見せどころなのかなと思ひますが、ぜひ、今から「TEAM EXPO 2025」を発展させていって、万博会期中にそういう場をつくっていきたいと思ひます。

そして、できれば「SDGs+ beyond宣言」といったものを万博の最終コーナーあたりに発出して、それを世界に向けた万博のレガシーにしていきたいなと思ひます。

(石川) 万博と絡めて大変分かりやすい説明、ありがとうございます。

1点ご確認したいのですが、“TEAM EXPO 2025”は、理系の、ドローンを飛ばすとかMaaSとかではなくて、例えば健康体操をやるとか、街で普通の人々がやるような、そういう取り組みでも結構なのですよ。

(森) おっしゃる通りです。中学校、高校生のロボットサイエンス部は、ロボットを使って社会の福祉を増進するとのことですが、そうではなく、SDGsそのものの課題でも、笑いを追求するといった課題でも結構です。

(石川) 万博というと、最新技術でなければいけないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、今、副事務総長がおっしゃったみたいに、笑いか体操とかでも結構なので、どんどん出していればなと思ひます。それを確認したくて、今、お聞きしました。ありがとうございます。

では、続きまして、沖先生、お願いいたします。

(沖) SDGsは納得感というか、多分、企業に限らないですけども、組織で1番大事なものは、上が本気かどうかというのが見抜かれるということだと思います。やっぱり1番上が仕方なしにお付き合いでやっている、みんながバッジつけているからつけるけれども、こんなのバッジつけていけばいいよね、という態度は、やっぱり下は見抜くので、上が本気で考えていて、何かしなければいけないとなったら、下が動くような組織でなければいけないでしょうし、やはり上が本気かどうかというのが1番効くと思ひます。

今、東大は、五神総長が世界のコモنزとしての大学、より良い社会をつくれる人材を出している東大になりたいということで、やっぱり上が本気なのですけども、それを考えたときに大事だと思いますのは、理系、文系とそもそも分けるのがまずよくなくて、ある課題があったら、その課題の解決に必要な知識を持ってくる。分からなければ、その専門家に聞く。そういうチームをつくって、一緒に問題解決ができるような人材を育てなければいけないと思います。

もう一つは、やっぱり正義感とか人と社会への興味、あるいはそういう知識というのをうまくまとめてコミュニケーションして、人と共感力を持って実現していけるような、そういう能力というのは大事だと思います。そういう意味では、理系、文系を分けるということをまずやめて、理系を勉強していても、関心があったら、社会学も、心理学も、経済学も勉強するし、文系にいても、必要であれば、エネルギーについて、あるいはエネルギー処理の技術について、あるいは環境保全の技術について学んで、理解して、ちゃんと議論ができるという基礎力をつけていくことが大事なかなと思っています。

(石川) ありがとうございます。また大変たくさん鋭い指摘をいただきました。上が本気というのは、本当にその通りなのかなと思っています。沖先生の問題提起にもありましたけれども、I mean businessということなのかな。みんなが本気になるためにはビジネスにしなければいけないのかなというのを、今回聞いて思っております。あとは、やはりチームをうまくチームアップしていくということもとても大事だなと思っております。理系、文系を分けないという指摘も大変興味深く聞かせていただきました。

では、小林会長、どうでしょうか。人材育成を進めていくためには、どういったことをやっていくべきなのか。今までの議論を踏まえて、様々な角度からご意見をいただければと思います。

(小林) 最初に申し上げましたように、人間というのは、手とか足の機能を外部化することで非常に便利になった。それで、今や脳もついに外部化しつつある。それでは、残った自分自身、私とは何なのか。もっと言えば、そもそも人間って何なのか。そして、そんな人間である私が生きている根拠、自分は何のために生きているのだろう、何のために社会にあるのだろう、自分のレゾナードル、存在というのは何なんだろう、という根源的な問いかけが基本的にすべてだと思います。

そうすることで、自分を大切にすることというのは、人も大切にすることだという、そういう基本的な哲学というか、ある意味では、1番サイエンスと近くにありそうで遠かった心性をもう一度中心に引きずり出す。あるいは芸術という一見縁遠いものを、まさにサイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、数学の真ん中に組み込むというSTEAM教育的なアプローチ、文字通り文理融合的な教育が必要だと思います。

そして、年齢差別をするつもりはないのですが、やはり若い人が頑張らない社会というのはあり得ないと思うのです。明治は10代、20代の人材であれだけの変革をやれたのだから。それが今では、若い世代に債務ばかり積み残そうとしている。今はパンデミックだから、緊急避難で必死にお金を使うのは分かるけれども、それにしたって100兆円も国債を発行するような状態で、大人たちというのはいかに今だけを考えているか。今さえ良ければ、自分さえ良ければ、という人があまりに多い。石炭、石油を

燃やしまくるのも、まさに今さえ良ければなんですよ。やっぱり高齢者というのは世代間の負担格差というのを認識しづらいのだけれども、こういう基本的なところをしっかりと認識して次世代を大切にすることが、教育も含めて、今、1番重要ではないかと思います。

そうかといって、環境負荷のない江戸時代にもう一回物理的に戻ることも不可能なわけで、結局、イノベーションという打ち出の小づちを夢見て、思考停止に陥ってしまうのですね。イノベーションというのは、私が先ほど申し上げましたように、30年、40年かけても、本当の経済的価値にはならない、これも事実ですから。そこはしっかり見据えたうえで、どういう基本計画を作るかが非常に大事です。

先ほど、沖先生が言われたように、2030年まで、たった10年ですよ。2050年にしても、たった30年ですよ。テクノロジーとかサイエンスの時間軸からすればあまりに短い時間しか残されていません。そこで美しい絵を描いたところでしょせん欺瞞になります。そこは冷静にしっかり見ながら、やっぱり現実には現実として、人間はおいしいものを食べたいでしょうし、快適な車に乗りたいたいでしょうし、快適な家に住みたいのだから、それはそれとして、人間的欲望とサステナビリティの間のどこに最適点があるのかということ、本気で考えるときがきたなという気がしますね。

(石川) こうやってお話を聞くと、本当に経営者というのは大変だなと思います。先ほどの沖先生の話からいうと、22世紀を見据えつつ、足元の収益も稼がなければいけないのかなと思うのですが、その辺の苦勞についても、もう少しお話しいただけるとありがたいのですが、小林会長、どうでしょうか。

(小林) やはりリーダーというのは、一つの方向にみんながある程度納得感を持てるよう、これをどう引き出すかがポイントかなと思います。非常に感性の豊かな人は、もう20年、30年先が見えますから、自発的に手を打つじゃないですか。ところが、今、自分が会社に行って給料をもらえることしか考えない人もいます。それでもなお、全体としてはベクトルを合わせていかなければいけない。したがって、無用なところでフリクションを起こして余計なエネルギーを使わないようにしながら、全体をあるべき方向に持っていくという、ポイントはその辺かなと思います。

(石川) ありがとうございます。やはり経営者としては、従業員に納得感を持ってもらってベクトルを合わせることが重要だと認識いたしました。実際の経営で苦勞されている方のお話は大変重いなと思って聞いておりました。ありがとうございます。

では、次に、最後のテーマに移りたいと思います。今まではSDGs全般の話だったのですが、やはり世の中でもグリーンリカバリーというような話も出てきて、環境関連のゴールがSDGsのなかでかなり重要になってくるのかなと思います。パンデミックがなぜできたのかということも、やはり環境がおかしくなったからというように考えられるかと思っています。

そこで、私たちは、実際に政府ができること、企業ができることは何なのか、そういった話をお聞きしたいなと思っております。ここは沖先生、小林会長、森副事務総長の順番にお聞きしたいと思っております。

まず、沖先生、よろしく願いいたします。

(沖) まず、政府、企業と分けたときに、例えば気候変動対策にせよ、感染症対策にせよ、自分だけ対策をしないで、ほかがみんな頑張ってくれると得しますね。こういうのをフリーライダーというわけですが、そういうフリーライダーが生じないように、真っ当に社会のルールを守りながらビジネスをやっている人たちを守っていくというのは、政府の責任で、必ずやらなければいけない。逆に、企業のほうは、政府がなくても、企業、団体の自主ルールでも、とにかく環境や、あるいは社会の不当労働とかそういうものに外部不経済を押しつけて儲けることをやめるとというのが、まず1番大事なのではないかなと思います。

そうしたうえで、気象というか、気候変動、環境、感染症で、どれもアウトブレイク時には、ふだんの数百倍の負荷が社会にかかるわけですね。平常時にはほとんど新型コロナウイルスはなかったわけですが、それが何百人、あるいは今だと3,000人近い人が毎日かかって病院に来る。それを何とかさばかなければいけない。あるいは気候変動によって洪水が増えると、ふだんの100倍、1,000倍の川の流量になって洪水が起こる。

こういうアウトブレイクに対しては、地震と違って、起こっている最中に社会が何らかのアクションができるわけですね。アクションできるのだけれども、何が起こっているか、よく分からない、情報が不確実だ、あるいは対策なんかしなくてもいいという人もいます。そうしたなかで、社会的な決断をして、ある一定の対策をしなければいけない。あるいは事前の準備をたくさんしていると、今度は平常時には経済的に非常に非効率である。

では、どんなバランスでやればいいのか。こういうところをうまくマネジメントできるような体制を、パンデミックにしろ、気候変動、洪水問題にせよ、もしかすると、ほかのいろんなアウトブレイクというものもあるわけなので、そういうところで社会的なバランスの取り方、どのくらいまでのリスクだったら受け止めるし、どのくらいまではちゃんと事前の準備をしておこう、というような社会体制をつくっておくのが非常に重要なのではないかなと思っています。

(石川) 確かにフリーライダーを出さないとか、外部不経済の問題、あと、コモンズの問題とか、経済学でいう問題、ミクロ経済学の問題がここに凝縮しているなということは、今、沖先生の話聞いて思いました。そのなかでどう社会的なバランスを取るのか、大変重い問題提起だと思います。

続きまして、小林会長、いかがでしょうか。

(小林) 政府は今回、2050年カーボンニュートラルという非常に大きな目標を立てました。全世界的に基本的には同じ流れですけれども、そういう大きな目標をまず立てるとするのは最低限やるべきことです。そういう意味では、バイデンさんのパリ協定への復帰も含め、非常にいい方向になりつつあると感じます。

ただし、先ほど申しましたように、サイエンスやイノベーションをあまりに楽観的に設計して、この30年間ですぐ目標に到達できるような絵を描くよりは、時間軸を見て、その確度も含め、あるいは投資の必要性や、負担の大きさ、偏りも含めて、精緻な議論が要るのではないかなと思います。

それを分かったところで、では、税をどうするのか。炭素に対してどういう税金をかけるのか、ある

いはカーボン消費税的なものがあり得るのか。そういう意味では、やっぱり債務がこれだけ大きくなってしまった国家として、今、実態はワイズスペンディングになっていますが、まさにワイズスペンディングをぜひやってもらわなければいけないと思います。

民間企業としては、金融等を含めてTCFDのような動きがありますし、化石燃料関連の巨大資産を座礁資産と捉える傾向さえ深まってきています。そういう動きとともに、カーボンニュートラル化に向けた企業によるアクションが、先ほど沖先生が言われたように、マーケットでも相応に評価される時代になりつつあります。このように、経済社会システムそのものが変わっていけば、企業は時価総額を上げるために、単に利益を上げて資本効率をよくしていくだけではなくて、インタangibleなアセットも含め、どういうテクノロジーを使って例えばCO₂削減、あるいは海洋プラスチックごみ問題の解決に対して手を打っているかということまで、日々の企業活動を通じて示していく必要があります。

今や、財務のみならず非財務情報も含めた統合報告書が、企業だけでなく東大をはじめとしたアカデミアでも広まってきています。社会における企業をはじめとした主要な組織体が、財務以外の非財務の説明責任も果たしていくようになれば、あと5年もすれば、大分いい方向が見えてくるのではないかなと思います。

(石川) 確かに、今、「ワイズスペンディング」という、またキャッチーなお言葉がありました。世界中で第二次世界大戦直後ぐらいのGDPに対する国債の発行残高になっていますので、研究開発にどんどん国のお金が投じられない。そういったなかでどうやってワイズスペンディングしていくのかというのは、非常に大きな視点だと思っております。財務だけではなくて、いろんなことが見られるなか、企業としてもどういうことをアピールしていくのか、そういったご指摘だと思います。ありがとうございます。

では、森副事務総長、どうでしょうか。

(森) 先ほどから2025年の万博はデジタル社会への対応と申しますか、デジタル空間のなかでどう付加価値を高める経験をしてもらうかということが重要だと申してきましたが、もう一つ、環境問題というのは避けて通れない問題でございまして、2025年の万博会場のなかでどうカーボンニュートラルを実現するのかということ、今、我々は必死になって考えております。

エネルギー、電力やガスをどうするか。また、会場内を走る車というか、車両ですね、物流もございまして。こういうものを、2050年といわず、2025年のなかで2050年の姿を如何に見せるかというのが、トップアジェンダになっておりますし、我々は、専門家の方々と、今後、その実現に向かって走っていきたくて思っております。

もう1点は、リユースとかりサイクルという話がございまして、70年のあのパビリオンも何棟かは北海道や兵庫県の市町村に運ばれて使われたのですが、大部分のものは壊されたわけです。我々、できればパビリオンやその他のいろいろなものを、ぜひ最初から、このパビリオンはどこの公民館で使ってもらおうとか、リユースというお見合いを先にできないか、そこでレガシーとして残してもらおうような計画ができないか、そのためにどういった工法、つまり、パッと壊してパッと造れるような、プレハブ

とっていいのか、どういう工法がいいのかといった研究もプロデューサーの方々と一緒にやっております。

また、感染症について申しますと、今のCOVID-19は2025年までには解決しているのかもしれませんが、人々の意識は多分変わっていると思います。なるべく密にならない、これは、万博会場内だけではなく、アクセスのところでも重要でございます。万博は島でやりますので、アクセスルートが限られてくるわけですが、どう快適に万博会場に来られて、どう快適に万博の7時間、8時間、9時間の体験をしてもらえるか、これはCOVID-19が出てくる前からの課題だったのですが、ますます人の意識はそちらに流れてくるのではないかと考えております。課題山積みですが、逆に言うと、いろんな企業の方々、産業界の方々にとってのビジネスチャンスというか、この万博を利用しようという動きにこういう課題がつかっていけばいいのかなと考えております。

(石川) カーボンニュートラルの実験的なことができれば素晴らしいと思って聞いておりました。加えて、これから人が集まる場所では感染症対策が絶対必須になると聞いております。さらに、リユースというのも非常に重要な概念かなと。1970年の万博というのは、基本的には太陽の塔と、それ以外にたつの市に移ったカンボジア館ぐらいしかないのですけれども、たくさんリユースされるものがあると、それも一つのレガシーになるかなと聞いておりました。ありがとうございます。

そういうわけで、最後に総括に入りたいと思います。様々な角度からいろいろ討議してきて、皆さん、まだお話し足りないこととかたくさんあると思いますので、ぜひお聞かせ願えればと思っております。順番は、小林会長、森副事務総長、沖先生にお話しいただきまして、最後に私が簡単にまとめさせていただきますと思っております。

では、まず、小林会長、よろしく願いいたします。

(小林) 21世紀に入ってからちょうど20年たった現在の時代状況というのは、人間が今後どちらに向かっているのかという岐路に立っているような気がするのですね。

ですから、第一次から第三次の産業革命を経て、150年、200年前に280ppmしかなかった大気中のCO₂が徐々に増えて、今、410ppmを超えてしまった。このまま放っておけば、毎年、2ppm、3ppmの上昇でも、2050年だと450ppmになります。そうすると、気温は1.5度か2度上がってしまう。しかも、放っておけば、年に大体3～4ppmは増えるという話なので、先ほど申しましたけれども、誰が考えても、単に脱炭素とか低炭素とかいうコンセプトだけでは、もう地球環境は守れないところまで来てしまった。

例えばワイン醸造も、山梨より十勝のほうが生産に適するようになるなど、適地がだんだん北に行っていると聞きます。日本には、生態系なり、水系なり、栽培品種なり、変化にどうにか適応していけば、50年、100年もつかどうかは別として、何とか対応できるようにするための技術もあると思うので、そのようなありとあらゆる人間の英知を集めて、この環境問題に対応していかないといけないわけです。

島嶼国は水浸し、熱帯雨林が減って、シベリアの永久凍土は溶けて、いろいろなウイルスが出てきてパンデミックはもっと激しくなってしまうというような想像力は絶対必要だと思いますし、それに加え

て、やはり人間が、善し悪しは別にして、進化の方向性として自分の脳を外部化してしまった。これがバンドラの箱を開けたのかどうかは分かりませんが、シリコンをベースにして、人間の脳以上に大変な高性能なものを創ってしまった。ロボットを使ってアバターを生み出していくといったように、自分以外の客体が生じてしまうなかで、人間はどう生きていくのか。

デジタル化は、人間が無駄な労働をしなくて、より生産性の高い分野にいけるという意味ではいいのですけれども、もっとしんどい、自分自身とは何かというあたりに切り込んだ本質的な問いを發するしかない時代がついにきてしまった。量的な変化が増えていくと、質的にも変わってきますから、ひょっとして人間みたいなロボットができるかもしれない、そういう大変な時代に面しているのだということも考えながら、それでも人々は日々の生活を送らなければならない。なおかつ、企業でいえば、そういうことに対して、とくにリアルな観点で申し上げれば、いかに効率良く稼げ、環境を破壊しない、“More from Less”の世界にふさわしい事業ポートフォリオを、大きなコストや投資が必要とはいえ本気で実現しなければいけない。そういう21世紀だという認識が必要だと思いますね。

(石川) ありがとうございます。シンギュラリティの前に、ほんとに我々とは何かという問いかけをしていかなければいけない。大変重い問いかけがあったなと思っています。今、私たちは発展するかどうなのかの岐路にあるという、大変重いメッセージでした。

では、森副事務総長、どうでしょうか。

(森) きょうのシンポジウムの題名は、「サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営」ということで、このなかに万博を入れてくださったことに本当に感謝いたします。万博は、誘致のときは、「何で今更、展示が重要な？ 万博なんて、もう時代後れちゃうの？」みたいな声が関西・大阪でも結構あったわけですが、だんだんそういう意見がなくなってきました。万博は、もしかしたら、展示だけではなくて、コトづくりではないのか、笑いの追求じゃないのか、と各々の人がそれぞれ個別に解釈して下さるようになったことがいい動きかなと思っていて、こうした流れをぜひ関西・大阪から東京、日本全体、世界に広げていきたいと思っております。「大変な時代であるからこそ、万博をやるんだ」みたいなことをみんなが言い出してくだされば非常にありがたいなと思っています。

また、本日、小林様がお話された、まさに命の拡張というのは、プロデューサーの一人、石黒浩先生が追求してくださっていて、STEAM教育というのは、ピアニストでもあられる中島さち子さんが追求してくださっていて、いのちの8テーマを万博協会が主導してやっていくわけです。このいのちの8テーマに触発された形で、先進国、途上国、また企業、企業グループの方々に万博に参加していただいて、盛り上がりを見せるものになっていく、うまい軌道にだんだん乗ってきたのかなと思っております。

これから政府は、万博の基本方針というものを閣議決定して、そこには技術だけではなくて、社会システムの変革をどう万博でやっていくのかといったことを盛り込もうとしてくださっていますし、我々協会としても、基本計画というものを出して、どういう万博をやっていくのかという基本計画1.0みたいなところで、先ほど申しましたデジタルの兼ね合いや環境への兼ね合いといったものも書き込んでい

こうと思っています。今日ご覧になってくださった方々のなかで、万博のことを初めて聞くという方も多くいらっしゃると思うのですが、我々、そのような形の万博をつくり上げていこうと思っていますので、東京の方、関西・大阪以外の方、ぜひ関心を持ってください。

東北の方々とかは、地元のお祭りを、バーチャルリアルかまだ分からないけれども、万博会場でもやれたらどうか、みたいに言われていますし、この前は沖先生から、お祭り万博にしたらいいいということ、2100年の姿を見せろという課題をいただいています、そういうものをぜひこの万博のなかで具現化していきたいと思っています。

これ、万博協会だけが主役になってもどうしようもないので、皆さんをはじめ、たくさんの主役が生まれていくことが万博成功の鍵だと思っています。本日聞いてくださった皆様、ぜひ万博に関心を持って、主体的に入ってきてください。

どうもありがとうございます。

(石川) ありがとうございます。万博という言葉を使ってうまく説明していただいたと思います。見ておられた方も、かなり万博に興味、関心が深まったと思います。

では、沖先生、よろしく願いいたします。

(沖) 万博ではないのですが、万博で思い出すが、昔やっていたポートピア、あれ1980年ですかね、そのときには神戸の学校に通っていたので、学校帰りに何回も行ったんです。何回も行くのは、何か楽しいからですね。

そういう意味では、リピーターを増やすためには、歌って踊れる万博がいいのではないかなと思って申し上げました。最初万博の説明を聞いたときは、SDGsにこだわり過ぎて、真面目に取り組まなきゃいけないという感じで、真面目に取り組むのは関西ちゃうやろ、という印象を受けましたので。やっぱり楽しいなかで、良い社会をつくろう、良い社会にはやっぱり笑いも必要だし、でも、真面目にエネルギーの消費量を減らす、資源の消費量を減らすというのも大事だ、というのが心に残るのがいいのかなと思いました。

私、70年万博の頃には、北千里というところに住んでいまして、近くなものですから、夜にダイダラザウルスとかいうジェットコースターに乗りに行ったのを覚えています。月の石を見たのはほとんど覚えてないのですが、北千里が有名な点がもう一つありまして、1973年のオイルショックのときにトイレトペーパー騒ぎが起こったのが北千里駅前のピーコックなんですね。50年たった今年、また我々はトイレトペーパー騒ぎを起こしたので、そういう意味では、人類、進歩しているのかしてないのか分からない。

あるいは、きょうは心の問題というのが大事だという話でしたが、やはり私たちがそうしてしまう心理、守らなきゃいけないけど、つい守らない心理、あるいはデマだと分かっているけど、つい買っちゃう心理とか、その辺を何とかしなければ、もっと持続可能な社会にしていけないのではないかという気がします。

そういう意味では、きょうは将来を考えるということですが、私、土木学会というところで22世紀の

国づくりというプロジェクトに携わったことがあります。そのときにいろんな方にお話を聞いたり委員で議論をしたりしたときに、最後の結論は、まず一つは、22世紀の国づくりを考えることは、私たちの幸せは何かを考えることであると。

つまり、2100年だと80年後でちょっと先過ぎるので、人口がどうなるとか、経済がどうなるとか、予測しようとしても当たらないのですね。先ほど、小林会長がおっしゃった通り、イノベーションがどうなるかについても、不確定要素が多過ぎるわけです。だとしたら、どんな社会になるだろうかを考えるのは、結局、私たちがどんな社会に生きたいか、どんな社会だったら幸せか、ということを考えることになるのだと思うのですね。

もう一つは、国家百年の計というのは人材育成なのですけども、さらにそれを延ばして、では、国家千年の計があるとしたら何だろう。それは、やっぱり文化じゃないかということになりました。文化が何か、また話し出すと長いのですけれども、私たちは、考えてみると、千年前の平安時代の文学とかが一応読める、分かる。そういうときからの言葉の体系、そして思想、そういうものの上に私たちの今があるわけなので、やっぱり生きていますよね。ということは、千年前の文化が今に生きていたら、私たちが今行っている営みのなかのいいものは千年後にも残っているだろうと思うと、頑張る気になるのではないかという気がします。

もう一つが、21世紀にどんな日本であって——日本という国がなくなるかもしれませんが——どんな22世紀を迎えたいか。22世紀になったときに、21世紀の日本あるいは東京、大阪はこんなだったよ、というのが世界史の教科書にどう載るのか。こんなふうに記述されたいという野心を持ってはどうか。

幸せ、文化、野心、どこが土木なんだと思われるかもしれませんが、これが私たちの考えたことです。それは、やはりSDGsにつながると思いますし、今、年の瀬なので、来年のことを話せば鬼が笑うと言いますが、10年後の2030年、80年後の2100年を語って笑うのは誰か。きっと私たちのこれから生まれてくる子ども達が笑顔になるのだと思うのです。なので、もっと10年後、80年後のことを語るというのが大事なのではないか、ということをお今日のシンポジウムに参加させていただいて思いました。

どうもありがとうございます。

(石川) ありがとうございます。本当にきれいにまとめていただいたので、私が何か足すこともないのですけれども、確かに、私たちがどうありたいかという問いかけがあったと思いますが、それは、先ほど小林会長がおっしゃった、自分自身がどうあるべきかという問いかけになるのかなと思っております。

簡単にきょうの私の感想を申し上げますと、やはり文系・理系の壁を壊していかないといけないなど。サイエンスの知識も大事だし、またシンポジウムを通じてよく出てきた言葉が心という言葉でございました。サイエンスの知識と温かい心、この両面を持つことが非常に大事だということを改めて思いました。

その結果、SDGsというのは、当然達成すべき話であって、SDGs+ beyond、22世紀、下手すると1,000年先まで考えていかなければいけない。それがとても重要になってくるのかなと。1,000年先を考えれば、おのずと次世代のことも考えていくのかなと思っております。そのなかで、万博をうまく使うということも大事なのではないかなと、思っているところでございます。

本日は、本当にたくさんの角度からいろいろなご意見を賜りまして、ありがとうございました。大変勉強になったシンポジウムだと思います。

では、最後に弊社の理事長であります翁百合より本日の議論のクロージングをさせていただきたいと存じます。

よろしくお願いたします。

